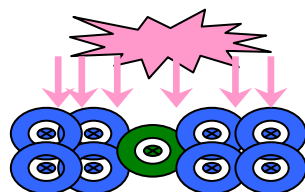


☆抗がん剤について ～分子標的薬と従来の抗がん剤との違い～☆

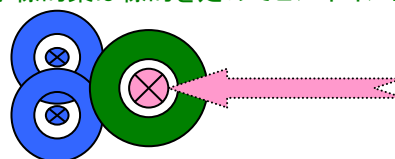
従来の抗がん剤の多くは、がん細胞が正常細胞よりも活発に増殖する性質を用いてがん細胞の増殖を抑える効果を現します。そのため、がん細胞以外の分裂速度の速い細胞（血液をつくる骨髄細胞、消化管の粘膜細胞や毛髪の毛根細胞など）にも影響を及ぼし、骨髄抑制（白血球減少、血小板減少）、消化器障害、脱毛などの副作用が出現します。



一方、近年使用されるようになった分子標的薬は、がん細胞で特異的に発現している増殖に関連する因子を抑制したり、がん細胞の増殖に必要な血管新生を抑制したりすることから、従来の抗がん剤に比べてがん細胞に対してより選択的に作用することができると考えられています。例えば従来の抗がん剤は、畑の雑草を駆除するために、ヘリコプターで薬を散布するような方法で広い範囲に効果を現します。しかし、雑草のない正常な部分にも悪い影響を及ぼしてしまいます。それに対して、問題の雑草だけにピンポイントで効果を発現させようとするのが分子標的治療です。



分子標的薬は標的を定めてピンポイントに作用



このため、今までとは違う効果が期待され、副作用も少なくなると期待されていました。治療前に効果予測ができるなどの新たな発見もされていますが、従来の副作用とは違ったタイプの副作用があることがわかっています。副作用としては、皮膚障害（にきび・皮膚荒れ）、高血圧、*手足症候群*、注射投与関連反応、出血などがあります。これらの副作用は、使用する薬剤で異なりますので、各パンフレットなどを参考にしたり、主治医へ確認したりしておくことも大切です。

*手足症候群とは、手足や指先、足底などの四肢末端部に起こる、しびれ、ヒリヒリ感・チクチク感、発赤、色素沈着、腫脹等を特徴とする病態

*投与関連反応とは、薬剤投与中または投与開始後24時間以内に多く発現する発熱、悪寒、頭痛などの有害反応の総称（アレルギー症状に似た反応）

主な分子標的薬

販売名	成分名	特徴的な副作用
ハーセプチン注射用	トラスツズマブ	心機能障害 投与関連反応
アバスタチン点滴静注用	ベバシズマブ	高血圧 血栓 塞栓症 消化管穿孔
アービタックス注射液	セツキシマブ	皮膚障害 投与関連反応 間質性肺炎
リツキサン注	リツキシマブ	投与関連反応
グリベック錠	イマチニブ	浮腫、骨髄抑制
スーテントカプセル	スニチニブ	高血圧、骨髄抑制、甲状腺機能低下、手足症候群、心機能障害
ネクサバール錠	ソラフェニブ	高血圧、手足症候群
タルセバ錠	エルロチニブ	皮膚障害、間質性肺炎
イレッサ錠	ゲフィニチブ	皮膚障害、間質性肺炎

*各薬剤で病気の状態（標的となるものを持っているかないか、遺伝子変異など）により、適応する病気や病態が異なります。適応は主治医などへ確認してください。